

小田実全集（評論 第7巻）

世直しの倫理と論理



講談社
小田実全集
Makoto Oda

はじめに

気楽に読んで下さい。

小さな都会の小さな病院のベッドの上に寝そべりながら（からだぐあいをわるくして、ここ半年ほど私は入院しています）、気楽に書いたからです。それでも、言いたいことはたいてい言ったつもりです。しかつめらしく、まるで世の中の苦悩を一身に背負い込んだようなこわい顔で読まないで下さい。まずもって、世の中の苦悩など一身に背負えるものではない。そう思っていれば、それは思いうりというもので——いや、そんなことはここでのつけかからゴタゴタ言う必要もないことでしょう。まず、この本を読んでみて下さい。

そのまえに、おなかのなかに何か入れておいたほうがよい。私の考えでは、空き腹で本を読むと、衛生にわるい。本の理解も妨げる。そんなことを言っても食う物なんかあるか、おまえはそもそも世界に飢えたる民衆のことを何と思っているのかと叫び出す人があるかも知れませんが（このところ、そんなせつかちで怒りっぽい若者が多いようです。それだけでも、世の中のありようがわるくなつて来たことだ）、まあ、そうせつかちに怒らないで下さい。せつかちに怒って、そんなふうにおらび上げてみたところで、世界は今すぐに変りはしない。

「世直しの倫理と論理」といういくぶんいかめしい題名をつけましたが、言ってみれば、「世直しバ

カ話」です。副題をつけるとすればぜひともそうしたいが、「バカ話」が本題で「倫理と論理」といういかめしいほうが副題でもいつこうにかまわない。

「バカ話」ですから、あつけらかんと途方もない話になるかも知れません。なんだ、こんなアホウなことと思わず笑い出されることもあるかも知れない。その笑いは微笑であり苦笑であるかも知れませんが、書き手の私としては、爆笑であつて欲しい。そして、ついでに考えて欲しい。爆笑のついでに考えたからと言って、その考えがバカげている、不真面目だということにならない。

正門があつて、玄関があつて、応接間があつて、というような、礼儀作法の教科書めいた本ではありません。あつちに飛び、こつちに寝ころび、ハタと気がついたらそこは台所で、台所で誰かがつまみ食いをしながらマルクスを読んでいる。いや、マルクスかと思つたらマン画だった、というような本です。すくなくとも、私はそうした本を書きたいと思つた。

起承転結あいととのつたアリストテレスさんのような本ではありません（あれは必ず眠くなるので、私は彼のぶあつな『ニコマコス倫理学』と『政治学』をともに眠り薬にしています）。ヘーゲルさんのような本のピラミッドでもない。あるいは、マルクスさんのように背筋をまつすぐに伸ばして頭の体操を強いられるしろものでもない。この本をお読みななれば判ることですが、ピラミッドは私は大きらいで、身分、家柄は親のカタキでござるか言つた福沢諭吉さんの言い方をまねして言えば、あんなものは私の親のカタキだ。そこへもつて来て、私は生来の猫背で、その上、体操はからきし駄目です。つまり、この本はそうした私にふさわしく、書き流しています。いや、いばつたふうにごくえるといやなのでこれは小声で言いたいのですが、そこに一種の決意をこめて、書き流しています。

だから、私の本です。

革命家——自分をそんなふうに先験的にみなしている人には読んで欲しくありません。その人たちのために、この本を書いたのではないからです。その人たちのためには、世にはいくらも大、中、小さまざまの「革命の本」がある。私はふつうの人間、タダの人のために——つまり、私自身のために、この本を書いた。私自身がどうしたものかと考えているからです。さきゆきどうなるものかと思
い悩んでいるからです。

読んでもらいたいのは、ぜひとも読んでいただきたいのは、たとえば、私自身のように人生にくたびれ始めた、しかし、なんとか少しはまともに生きつづけようとしている中年男です。老いては来たが、心のやわらかさを失なつてはいない老人です。元気にみちあふれながら、行きずりのその老人を思いやりのこもつた眼で見ている若者です。いや、そうした中年男、老人、若者の区別よりさきに、どうもこの世の中のありようはおかしい、まちがっている、そして、そのまちがったありようのなかに自分もふくみ込まれてしまつてまちがった生き方をしていのではないかと感じている人びとです。その人びとが自衛隊員であり、警官である場合もあるでしょう。「ミツビシ」の社員である場合もあるかも知れない。それらの人たちにも、ぜひ、読んでいただきたいと思う。そのつもりで、この本を書いた。

〔第十八刷にあたって〕

私がこの本を書いてから、もう二十年が経っている。そのころとは時代が変り、世界のさまも大きくちがつている。しかし、私はこの本を書きなおす必要がないと思つている。それは、この本に書いたことのたいていが、私がこの本で書いた「世直し」の必要をふくめて今の日本の社会にあてはまることだからだ。ただ、ひとつ、ここでつけ加えて書いておくことがあるとすれば、東ヨーロッパやソビエトの市民は彼ら自身の「世直し」をやつてのけた——そのことだけだろう。私たち日本の市民は私たち自身の「世直し」をかつつと同様に、いや、かつて以上に今、必要としていないのか。

一九九一年九月三十日

著 者

（*編集注 岩波新書上巻より）

目次

はじめに

I 無数のひとりの人間

- 1 ひとりの人間のことがかかる
- 2 「生ま身の思想」について・または、「本」は「思想」ではない
- 3 「まき込まれる」側の政治学
- 4 佐藤さんとサトウリンさんなら同じことだ
- 5 人間はややこしい・マルクス主義と運動
- 6 「運動」はなくて「運動者」がいる

II 「生きもの」としての人間から

- 1 「ぶざま」と「みごと」・それに、ジャンの畑
- 2 「ともに死ぬもの」「ともに生きているもの」
- 3 人なみに長生きして、安楽に生きていたい
- 4 時間のひろがりのなかで

- 5 どうせ死ぬのだから……
- 6 生きていて、生きていて、あくまで生きていて
- 7 歯どめとしてのくらしのありよう
- 8 人間はまことに手前勝手だ

III くらしと「人間の都合」

- 1 くらしの中身・「いのち」「しごと」「あそび」
- 2 「マイ・ホーム」の幻想、「会社コンミュン」の幻想
- 3 「生きがい」を求め始める
- 4 「商売の思想」・すなわち、「かつぎ屋」マルコ・ポーロの言いぶん
- 5 人間には「人間の都合」がある

IV 「まき込まれた」歴史、「まき込まれる」現実

- 1 「戦後は終わった」
- 2 「大元帥陛下」Ⅱ「天皇さま」
- 3 戦前と戦後は切れていない
- 4 「民主主義コンミュン」と「民主ファシズム」
- 5 「世の中」、そして、「世直し」

V 「しくみ」をかたちづくるくらしのなかで

1 くらしのふりはばと「しごと」のふりはば

2 私たちの日々のからしが「しくみ」をかたちづくる

3 「チッソ」の少女社員とカーリー中尉と大統領と私たち

VI 「しくみ」のなかの人間・人間のなかの「しくみ」

1 「しくみ」は人間を見えなくする

2 「たのしいしごと」と「いやなしごと」

3 「革命」という「たのしいしごと」

4 「いやなしごと」がたのしくなる

5 自分で自分を「強制収容所」にほうり込む

6 「しくみ」が「しくみ」を自分でつぶす

VII むくろの考察

1 お坊さんと葬儀屋・それらを拒むむくろ

2 むくろが反逆する

3 自分で自分をむくろにする

VIII 「えらいさん」「小さな人間」「タダの人」

- 1 くらしに立ち戻る、「ピラミッド」に立ち戻る
- 2 警官には名前がない・徒党をくんで強訴する
- 3 「えらいさん」と「小さな人間」・「キツネウドン大王」の誕生
- 4 「帰せ」との怒号おさまり蟬時雨・「大王」たちの「思い出」^{メモワール}
- 5 「階級」について・その運動論的考察
- 6 「労働者」は「ストライキ」をする
- 7 「特権」は棒ぎれとして使え・「タダの人」の誕生
- 8 「タダの人」として

IX 平等と自由

- 1 「悪平等」はいいことだ
- 2 くらしのすみずみまで、くらしのすみずみから
- 3 就職は「天災」か
- 4 自分のことは自分できめる

X 「身銭を切る」ことから

- 1 トーシャ版は使うからトーシャ版だ

XI

- 2 すべては自分に立ち戻つて来る
 - 3 紅衛兵のゆくえ、「コンミューン」のゆくえ
 - 4 自分の背中が見えてしまったあとで
- さて、どうするか
- 1 人びとの運動・その原理とありよう
 - 2 運動は自分が始める、ひとりでも始める
 - 3 ことばのこと、日本語のこと
 - 4 私の「世直し」のことば、私の「世直し」

三つの提案

世直しの倫理と論理

I 無数のひとりの人間

I ひとりの人間のことが気にかかる

ひとりの人間のことをあくまで考えたい。気にかかるからです。どうしようもないと思っ
ています。ときには、こわくなるからです。しかし、そこにしかよりどころはないと考
えているからでもあります。

ひとりの人間のことと言っても、誰か特定の人物のことではないのです。誰のことでもよろしい。
あなたのことでも、私のことでもよい。あなたというのは今この本を手にかけているあなたのこと
で、私は書き手の私で、とにかく、ひとりの人間のことです。生ま身の中からだをもった、生
きている人間のことです。そこから、考えたい。そこにあくまでこだわりたい。

もちろん、世界の大勢が気にかからないというわけではありません。人類の運命というものにつ
いても、私は関心をもっているほうだ。日本国、日本民族の現状、未来も大事で、考
えないというわけではない。GNPの数字も鉄鋼の生産量もまるつきり気にならないと言
っては、かえってウソになる。あるいは、歴史のゆくえというようなことについてお
もいをめぐらせることもないではない。日本革命、いや、もうひとつ大きく言っ
て、世界革命の展望について夜を明かして（もつとも、いつのまにか眠ってしま
っていたが）議論したこともある。しかし、ほんとうのことを言うと、私
がもつと気に

かかっているのはひとりの人間のこと、彼のくらし、感覚、考え、欲望、行為、あるいは、ため息、祈りのことで、それはいつのまにか私のからだの奥深く入り込んで、そこに居すわってしまっていて、私が何をしようとか何を考えようと、そこからしか出て行くところはないし、そこにしか立ちもどつて行くところはない。

ひとつは、生まれつきというものがあると思うのです。生来、たとえば、世界を手玉にとつたような大議論は、それがまちがっているとか気に入らないとか言うまえに、この言い方がいちばんピッタリと思うのですが、肌がなじまない。それほど、私の違和感を生得、いや、生理的なもので、たぶん、論理を超越している。もちろん、私とても、そうした大議論をやらかさないとはいわけてではない。ときには思わず年がいもなく熱中してわれを忘れるのですが、そのうち、どこやらからかウソ寒い風が吹いて来て、私の舌は重くなり始める。やはり、どうあつても、もう一度くり返しますが、肌がなじまないのです。ウン、ウンとうなずいているときでも、からだ全体がうなずいているような気はしない。首から上だけでうなずいているような感じだ。これには、大阪生まれの大阪育ちということもあるかも知れない。大阪というところは、そういう大げさなものの言い方がきらいなところで、誰かが、すぐ横からえらいたいようなこと言うてはりますなア、と言いつつ、私の場合、その発言者はたしかに私のからだのなかにいて、それは、たぶん、さつき言った、私のからだのなかの奥ぶかいところに居すわっているひとりの人間なのだろう。彼はさらにことばをつづける。お話はよう判りました、それで、わたしはどないなりますねん。いや、彼はさらにさらにと言つてのけるだろう。彼の口調はまったく深刻ぶつていないので、いつそう私にはこたえるのだが、あんたはどないしますねん。

実際、このひとりの人間というやつが、どこへ行こうと、何をしようと、私の眼に見えて来てしまうのである。彼の声がきこえて来てしまうのである。

そいつは大阪弁だけでしゃべっているのではなかった。東京のことばで、津軽のことばで、熊本の方言でしゃべった。英語でしゃべったこともあった。朝鮮語の場合もあった。スペイン語、ギリシア語、ロシア語、チェコ語、スワヒリ語、ベトナム語、ヒンディ語のときもあった。むろん、私はそんな多くの外国語を知るはずもないから、それは私の想像力がくみたてたことばであつたが、それにしてもみんな、同じことを言うのである。なかには、ことばを何も発さないままに私をじつとみつめていてそれがそのままことばである、ことば以上にことばである場合もあつたが、さりとて、彼はいかにも深刻げに、たとえば、「根源を問う」というようなものの言い方をしていたのではなかった。彼もまた、そのことば以上にことばである無言のことばをことばで言いあらわすなら、大阪弁でさりげなく、むしろあつげらんとか言いやうのないことばを発して、それはたしかに三つだつた。えらいたいそうなこと言うてはりますなア。それで、わたしはどないになりますねん。そして、あんたはどないしますねん。

困つたことに、ひとりの人間と言っても、それがいくつもいくつも、つまり、無数にいて、無数にいながら、それでいて、やはり、ひとりひとりなのだから、ほんとうに始末がわるい。統計の数字でくくつてしまうわけにいかない。国籍で分類することもできない。階級という便利なことばをもつて来ても、いくらでも、ひとりひとり、はみ出してしまふのである。ひとりひとり、顔があきらかにちがう。表情がちがう。からだつきがちがう。年がちがう。くらしがちがう。ことばをきくだけでも、

性格がちがうことが判る。名前は知らないが、たしかに、ひとりひとり、名前をもっていることは私には判る。「無名の大衆」という一言で片づけ去ることはできない。「無告の民」というきいたふうなことばで、それでは私がかわりにものを言っておいてやる、というわけにいかない。みんなはべつべつのことを言っているのです。それでいて、同じことも言っていて、それが、おそらく、いちばんかんじんなことで、きつき述べた三つのことだ。

つまり、このひとりの人間というのは、そのひとりでもって人間を代表するというような抽象存在としての人間、たとえば、「人間論」の対象として存在する人間ではないということです。生きている人間、と言うと、そういう「人間論」のなかの人間は生きていないということになりそうなので避けたい（すぐれた「人間論」の人間は生きて、そうでない、ほんとうは「人間論」の名に値しない）。それよりは、生ま身のからだをもった人間と言っておきたい。からだばかりでなく、奇妙な言い方をあえて使って言えば、生ま身のくらしをもった人間、あるいは、生ま身の思想をもった人間、つづめて、それらすべてをふくめて、生ま身の人間。

生ま身のくらしというのは、抽象的にとらえられた生活でないということです。これは、生ま身のからだだと、「人間論」のなかでとり上げられるからだの関係に似ているかも知れない。後者は、人体模型のようなものだと思えるのです。いや、それほど死んではいないで、ちゃんとすべての臓器は動いていて、からだは汗までかいているかも知れないのだが、ただ、おそらく、その汗にはおかないのです。いや、現代のそういう技術は進歩していて、汗のおいまでつくり出しているのにちがいないのだが、それは、たぶん、汗のにおい一般というやつで、たとえば、小田実の汗のにおい

は佐藤栄作さんの汗のにおいとはおおもとのところは同じでありながら（どちらも人間の汗のにおいです。香水とタクアンのおいほどちがうはずはない）、それでいて微妙にちがっている。そして、私には、その微妙なちがいが、あるいは、ちがいの微妙さそのものがきわめて大事なもののように思われてならないのです。ついでのことに言うと、小田実も佐藤さんも同じ胃病をわずらうこともあるだろう。同じように吐き気が来て、同じように痛む。しかし、その吐き気、痛みにはたしかに微妙なちがいがあつて、そのちがいはかなり、いや、ときには、きわめて本質的なものではないか。

くらし——生ま身のくらしについても同じことが言えると思うのです。同じ中産階級のくらしと言つても、AのくらしとBのくらしのあいだには、どこかに微妙なちがいがあつた。ああ、こんな画一的な生活はへドが出ると他人が言い、本人が思つていても、AのくらしとBのくらしは、それは、やはり、どこかで、AのくらしはAのくらし、BのくらしはBのくらしとしか言いようのないもので、それぞれにA、Bの名前がついたもので、二つは、たとえばいくら「スワッピング」とやらをやつてみたところで同じにならない。同じ月賦のピアノがあつたところで、ピアノの傷みはちがうし、また、その存在がA夫人にあたえるであろう心のかげりはB夫人にあたえるであろうそれとは微妙に同じで、また、ちがう。私には、ときとして、いや、きわめてしばしば、その同一性と同様に微妙なちがいが大きく眼に見えて来るのです。そうでなかつたら、そもそも、わたしはどないになりますねん、と言つてから、あんたはどないしはりますねん、と言はずがない。生ま身のくらしに密着しなければ、私のくらしもA、Bのくらしと大差なくて、いや、そんな他人事めいた言い方はよくない、さつきから述べて来たひとり人間の人間というのは、いかに無数にたち現われて来ようとも、究極的には、いつも、

それは私で、A、Bというのは、つまり、私のことだ。Aである私がBである私に訊ねかける。Bである私がAである私に言う。わたしはどないなりますねんと言つてから、言う。あんたはどないしますねん。

2 「生ま身の思想」について・または、「本」は「思想」ではない

生ま身の思想というものもあると思うのです。奇妙な言い方だが、思想というものはそもそもそうしたものでしょう。まずもつて、思想というものはない。そして、思想をもつ人間というものがある。これはいかにも奇をてらつた言い方のように見えますが、考えてみると、あたりまえのことで、「十八世紀フランス啓蒙思想」というものがあつたのではない。そういう名前で呼ばれる思想をもつた一群の人たちがいた。「ジャン・ジャック・ルソーの思想」というようなものが、空中に浮遊していたわけではない。ジャン・ジャック・ルソーというひとりの人間がいて、その生ま身の人間がものを考えたのです。

もちろん、ルソーの思想というものは、本になつて後世に伝わる。しかし、思想は本ではない。思想は現実に対する態度をふくみ込むものなのですが、本が現実に対接するわけではない。

こういう点がいちばんはつきりするものが、実践をふくみ込むのがかんじんかなめのこととなつていくマルクス主義という思想ですが、私は、思想というものをもつと動的に、人間の運動のひとつとして理解したいと思うのです。「思想」というと人びとがたちどころに思い浮かべるのは「十八世紀フランス啓蒙思想」であり、「ジャン・ジャック・ルソーの思想」であり、マルクス主義であり、ある

いは、いさかツムジ曲りの人なら、庶民の思想、土着の思想といったようなものであるにちがいないのですが、それらは言ってみればそうした題名の本が並んだ本棚みたいなので、そこに動きはない。完結してしまっていて、結果としての思想であって、運動としての思想ではない。

私が思想ということばでまず考えたいのは、運動——生ま身の人間の運動としての思想です。さつき、思想というものはない、思想をもつ人間があるのだと言ったのも、その意味なのですが、私にとって興味があるのは思想そのものではない。それよりは、ある人間——生ま身の人間が思想をもつという運動が私の心をとらえるのですが、思想とは、もともとそうした運動のかたちにおいてしか生ま身の人間には存在しないものではないか。それ以外のものは、たとえば、本ではあっても、あり得ても、思想ではない。

思想をもつという人間の運動を、もう少し分析して考えてみたい。それは、次のようなさまざまに運動の有機的な集大成、複合体として存在するものでしょう。読む。判る。感じる。考える。想像する。分析する。記憶する。記憶をよびます。書く。しゃべる。自問自答する。他人に問いかける。答を受ける。行為する。行為のなかで感じ、考える。欲求する。計画をたてる。決断する。決意する。ためらう。不安を感じる。勇気をふるい起す。……

こんなふうに思想をとらえて考えれば、たとえば、ひとりの人間がマルクス主義者であるということとは、いったい、どういうことなのだろう。もちろん、まず、マルクスを読むということがあつて、判るということがあつて、そのやり方で、つまり、マルクス主義的に考えるということがあつて、そうしたところでは、彼はたしかにマルクス主義者だ。しかし、感じるということにおいては、どうか。

本の世界のなかでなら、おれは飢えたる民の側に立つと決意さえしていたのが、いざ現実に飢えたる民が眼前にあらわれると、たじろぎ、無愛想な眼でにらみつける。そんな実例はいくらでもあることですが、その無愛想な眼は、はたして、マルクス主義者の眼なのか。

まして、その飢えたる民のための実際の行ないということになると、そのところがマルクス主義のかんじんなかめの部分なのですが、読むこと、書くことにおいて当代第一流の「マルクス学者」ということになっていても、そこにおいてマルクス主義者では決してないという人がいくらでもいる。いや、ぶちまけて言ってしまうえば、私の見るところ、「マルクス学者」にしてマルクス主義者という人物はまことに数すくないのですが、なかには、フグタイテンの敵であるはずの佐藤さんの政府からクン一等というようなクン章をもらったりする「マルクス学者」までいる。そんなところからクン章をもらっても、ご当人はまだマルクス主義者でいるらしいのですから、これはもうオバケの世界です。

ついでに言っておくと、これはこのところさかんに起っていることですが、この実際の行動ということになると、ほかのえらいマルクス主義者から、おまえのしていることはいったい何だ、そんなものはマルクス主義でないと叱られる場合もあるようです。これは政治運動についても、あるいはまた、「馬のシッポ」とフルシチョフさんに酷評されたような絵を平気で描くというようなことにも言われたりすることですが、どう考えても、自分のやり方はマルクス主義者としてまちがっていないと信じるなら、やはり、「馬のシッポ」を描きつけなければならぬ。そういう問題もこのごろではさかんに起って来ているようです。

あるいは、マルクスの本なんか一度も読んだことがなくせに、当代第一流の「マルクス学者」よ

りもはるかにマルクス主義者である人間もいるものです。そうかと思うと、「ヒューマニズム」というようなことを一度も耳にしたことのないヒューマニストもいます。いや、そんなふうに考えて行けば、マキャベリの書いたことなんか読みもしないくせに、とつくの昔にそいつをわがものにしていく人物もあまたいるものです。思想が本ではない、思想は、その思想をもつ人間のことだというのはまさにこうした意味あいのことなのですが、ナチズムというようなものも、『わが闘争』を読みもしないちまたの小ヒトラーたちによつてかたちづくられたものだったことは今さら言うまでもありません。彼らはたぶん『わが闘争』を読まなかった。しかし、彼らはそれを生身思想としてもつていたのです。

3 「まき込まれる」側の政治学

政治学というものを考えてみようと思う。政治学というと大げさになりますが、政治のなかで人間がどう生きていくか、生きることができるか——そうしたことをあきらかにしてくれる学問のことです。いや、「学問」などというと「東大教授・政治学専攻」というようなえらいさんが顔を出して来るにきまつているので、もつとくだけて言うのと、いやでもおうでも政治にまき込まれてしまっているこの世の中で、どう生きればいいのか、という手だてのことで、そういう政治学になると、私の参考になるようなのはまずないという感じがしてならない。いかにも穩健公正中立をよそおった学者のセイチな現状分析でなければ（そんなものはいが手だてとならない）、まことにあからさまな統治者の政治学で、たとえば、マキャベリ。あれは政治のなかで、統治者がいかに生きるべきか、いかに

わかるがしく生きるべきかを書いた本でした。マキャベリはもつともあからさまな本ですが、政治についての本というと、学者のセイチな現状分析をふくめて、たとえそこに人びとのくらしのことが書かれていたとしても、かんじんのことにはふれていないような気がしてならない。つまり、人びとがそういうわるがしい統治者の下でどのようにして生きることができるか——その具体的な手だてです。

こんなふうになると、すぐさま反論する人があつて、マルクスをはじめ、いろんな革命の本をおまへは読んだことがあるか、とおつしやるにちがいない。それらは、つまり、政治のなかでの人びとの生き方を書きしるしたものではないか。まず、人びとの現在のくらしのありようを分析し、ついで、あり得べき生き方を熟っぽく論じ、さらに、現在のくらしからあり得べき未来の生き方に至る過程（こゝとをかねて言えば、どのようにして、あり得べき生き方をわがものとするか）を述べている。十パひとからげにして言えば、革命の本とはそうしたもので、また、そうしたものでないと革命の本ではない。（ついでながら言っておくと、こういう基準で考えると、本屋にあまた積まれている「革命書」は、あれは、革命の解説書であつても、「革命の本」ではない。）

革命の本が人びとの生き方について書いてあるというのはたしかな事実です。私もその事実を認めるのにやぶさかでないが、どこかにくいちがいがあつたような気がしてならない。うまく言えないが、たぶん、次のようにでも言えばはつきりするだろう。みんな、たしかに人びとのための本だが、人びとの本ではない。

それがいちばんはつきりするるのは、革命のたたかひのやり方を書いたくだりです。ここできまつて

出て来るのが「前衛」と「大衆」の区分けで、「大衆」は「前衛」によって「正しく指導され」ながら、そうすることで、たたかいに参加する。ここでよく使われることばは、たとえば、「大衆のなかに入って」というようなことばですが（さすがにこのごろでは、「入って」とは言っても「降りて」とは言わなくなつた）、こういうことばほど、私に「前衛」と「大衆」の区分けを感じさせることばはない。これについてだけは、スターリン主義を排し、人びとの自発的な運動を説く「新左翼」の革命の本もまったく変りがなくて、たとえば「ゼネストを背景としながら、広汎な市民大衆をまき込んで……」というようなことばが当然のごとくいくつも出て来る。つまり、どうあつても、大衆——私の言い方を使えば、人びとは、いつまでたつてもめざめた「前衛」が「まき込む」対象として、革命のたたかいのなかに存在するのにすぎないのですが、そういうことばに出会うたびに私は自問してしまうのです。さて、おれはどつちやろう。「まき込む」側に立っているのか、「まき込まれる」側に立つのか。いや、ほんとうのところは、私には答はつきりしていて、私はそうしたことばに出会うたびに、ひそやかに決意をこめて自分は「まき込まれる」側に立っている、どんなことがあろうとそこに立ちつづけるのだとあらためて思う。それで私の場合はいいのですが、私が気にかかるのは、その革命の本の読み手のうちの何人が自分は「まき込む」側に立っていると考えるのかということです。いや、これは逆に言つたほうがよいでしょう。何人が「まき込まれる」側に自分が立つと考えたか。もうひとつ言つて、そこに徹しようと考えているのか。私にはそのあたりのことが気にかかつてならないのです。率直な感想を言えば、あんまりみんな——そんなふうな革命の本の読み手であるようなみんなが「まき込む」側に自分を結びつけて考えてしまっている。あまりにも安易に、ときには先験的に結びつけて

しまっていて、いったい、自分をそうみなし得る根拠は何なのか、までつきつめて考えようとしな
い。そこをつきつめて考えようとしなれないものだから、もともと、人間には、「前衛」であれなんであれ、
また、どのような目的をふりかざそうとも、他の人間を「まぎ込む」権利があるのか、あるとすれば
その根拠は何であり、誰がそれをきめるのかというおおもとの問題まで達するべくもない。ほんとう
のことを言うと、これまでの革命、あるいは、革命運動がかんじんの人びとのことをおき忘れたひと
りよがりのものとなり、いつのまにか「革命のための革命」になってしまふのがあまりにも多かった
のは、そこに原因があつたように思うのです。おかげで、東ヨーロッパの一角では「人間の顔をした
社会主義」を求める動きが激しく起り、東方では「文化大革命」が始まつて、そこで大きく問題にさ
れたのは、「幹部」と「人民」との分離でした。

実際、そこらあたりのことを、革命の本はどんなふうと考えているのか。書かれていることは、そ
の分離を防ぐためには「人びとのなかに入って」、人びとの声をよくきく、人びとから学ぶ——せん
じつめればそれだけのことでしかないのですが、それではあまりにも心もとないのですが（いつまで
行つても、分離を前提として、分離を結論としているような気がしてならない）、その私の感じる心
もとなきは革命の本の読み手、そして、もちろん、書き手には伝わって行かないような気がする。ほ
んとうに革命の本を読んでいて、書き手が自分が「まぎ込む」側に立つ人間であるという根拠を根本
のところから問題にして、そこからものを考えるというようなのに出会ったことがないのです。そこ
のところから安易で、そして、傲慢で、その安易と傲慢が、運動のやり方、いや、革命そのものに反映
しているような気がしてならない。彼がたとえレーニンさんのことを語るとしても、それはきわめて

統治者的、総理大臣的なレーニンさんで、そこからはスターリンさんまで一直線につながっているに
ちがいない。

そういう革命の本をひもとき、「広汎な市民大衆をまき込んで……」というような何気ない一句(まったく、何気なく、書き手は書いたのでしょうか。彼には私がなぜそんな何気ない一句にこんなまで執拗にこだわるか判らないだろう)に出くわすと、私の中からだのなかの無数のひとりの人間がいつせいにしゃべり始めるのを感じるのです。もちろん、まず、彼は、たいそうなこと言うてはりますなア、それで、わたしはどないなりますねん、あんたはどないしりますねん、とそここのところは前おきのようにして言つてから、ふとつぶやくようにつぶける。わたしはまき込まれるのはいやですな。つぶやくようにして小声で言つたからと言つて、それが彼にとつてどうでもいいことではないということ、彼の眼を見ていると判る。いや、いつもはニコニコと愛想のよい彼のからだはあきらかに怒りにふるえている。いつものように愛想笑いしながら、それでいて、全身が小きぎみにふるえていて、彼はさらにつぶやき声でボソボソとつぶける。耳をすませていないとよくきこえないが——いくら正しいことやと言いはつても、まき込まれるのはいやや。あんたかてそうとちがいますか。わたしの身になつてものを考えはつたら、そう思いはるのとちがいますか。

もちろん、この「まき込まれる」のはゴメンだというのには、デモ行進のために窓ガラス一枚破られるのはいやだという思想(これだつて思想——まさしく生ま身の思想です)がふくみ込まれていて、それは警察の指示で自警団をかたちづくるといふことにまで結びついて行くものですが、ここで見のがしてならないのは、「まき込まれる」のはゴメンだという気持の底には、もうひとつ、自分のこと

は自分できめる、誰の命令も受けたくないという、まさに革命の原動力（それを原動力としないような革命は、革命の名をかりたクーデタにすぎない。中南米諸国の「革命」のようなものです）となるような思想の芽もあきらかに存在していて、それは、さらに一步を進めて、「まき込む」というようなことを考えること自体がおかしいのだ、それだからろくなことにならないのだと力強く主張し始めるかも知れない。

私にはそのあたりのことが気にかかって仕方がないのですが、うち見たところ、それはどうも革命の本の書き手、読み手たちの主要な関心事ではないようです。それでは困ると思う。なぜ困るかという、人びとはこれまでずっとまき込まれつづけて来たからです。まき込まれて苦しめられ、その上まき込まれることで今度は逆に他の人びとをまき込んでひどい目にあわす。あげくのはて、両者はとつくみあいしながら共倒れする。戦場に駆り出された兵士のことを考えてみて下さい。彼は戦争にまき込まれ、まき込まれることで侵略に加わり、住民を殺す。おしまいは、自分も殺される。いや、殺されるのならまだましかも知れない。めでたく帰って来て、たいへんな苦勞をしたはずなのに、ついでにたいへんな残酷なこともしたはずなのに、またまき込まれる。いつのまにか、かつて彼を戦争にまき込んだのと同じようなことを佐藤さんがやり出しても、彼はまき込まれているよりほかにない。ただ、そういう連中を解放してやるのだ、そのためには彼らをまき込んで……とせつかちに力まないでいただきたい。あまりせつかちに力まると、佐藤さんの名前がサトウスキー、いや、サトウリンさんに変っただけのことではないかということにさえなにかねない。主人あるじ変れど、こつちは同じです。もちろん、佐藤さんよりサトウリンのほうがいいにきまつていて、くらしのことなど格段によく

なるにちがいない。しかし、そのお返しみたいにして、サトウリンに文句をつけることは一切まかりならぬ、そもそもサトウリンに文句をつけることなどこの世の中には存在するはずもないのである、どうしてかというと、サトウリンにはまちがいがいがないからである、人民のことを思い、人民のために寝食を忘れて働いているからである、しかるに、おまえはサトウリンに文句をつけた、しかるがゆえに、おまえは「人民の敵」だ——というふうな論理の展開が、まさに、くらしがよくなったことのお返しみたいにしてそこにはあるのかも知れない。それでは困る。くらしがよくなったということのなかには、今よりもっと自由にものが言える、文句もつけられるということがないと、チェコスロバキアという「兄弟国」に戦車でおどしにのり込むというようなことにまき込まれてしまう。私がこんなことを言い出すと、そんな自由などという高級な問題より世界の飢えたる民のことのほうが重要だと熱っぽく論じ出す人が必ず出て来るのですが、私はそうした議論には雄弁にいろんな論理をもち出して反論するより、むしろ黙っていたい。そんな議論はいくらしてみたところで、どんなに真面目にやってみたところで、議論のための議論と終るようで、私のからだのなかにいる無数のひとりの人間（のなかには、私がインドのカルカッタの街路でいっしょに寝た、まさに「飢えたる」民としか言えないような人たちも、ある社会主義国で、官僚の腐敗とダラクを打ちひしがれた口調で語ったその国の共産党員も入っている）が私に沈黙を要求するのです。

私には、こうしたサトウリンさんは、佐藤さんとひとつ大きな共通点をもっているような気がしてならない。それが私にサトウリンさんを心の底から支持させ得ないでいる根本原因だと思うのですが、一口に言えば、どちらもが「まき込まれる」側の眼でものを見ていないということだろうと思います。

ここで言うもののなかには、世の中のありようのこともありますが、もつと基本を言えば、人間自体のこともあつて、そのところがどうも私にはいただきかねる。いや、まっとうから対立するところに私を立たせている。

「まき込まれる」側の眼でもの見ないかぎり、そこに徹して見ないかぎり、問題の本質はあきらかになつて来ないし（人間がかたちづくり、そこでくらししているこの世の中では、問題の本質は人間のこと、人間はまき込まれて生きています）、そもそも、自分になぜ「まき込む」根拠があるのかという根本的な疑問が起つて来るべくもない。そして、その根本的な疑問に正面から答えようとならない政治は、おそかれ早かれ、おそるべき非人間的な政治になる。そして、このことを、「まき込まれる」側に立つ、無力のゆえにいやおうなしにそこに立たされてしまつている人びとは、おそらく理屈からではなく、長い人間の体験の積み重ねからだ全体で感じとつています。私には、自分もまた「まき込まれる」側に立つ、無力のゆえにいやおうなしにそこに立たされてしまつている人びとのひとりとして、このありようはそんなふうに見とれてはいるのですが、サトウリン主義、いや、スターリン主義に反対し、社会制度の変革ばかりでなくそのなかでの人間の変革を求めるこのごろの「ラディカル」（「急進的」というよりは「根源的」という意味だそうです）な革命の本も、そのところがまともに問題にされてはいない。それでは、サトウリンとあまり変らないのではないか。いや、佐藤さんにも共通するところがあるのではないか。

私はずっと「まき込まれる」側に徹したいと思うのです。無力のゆえにいやおうなしにそこに立たされてしまつてはいるのなら、逆にそこに徹するほかはない。そこに活路を見出すほかはない。私がそ

う考えるのは、ひとつには、そこにはつきりと徹しておかないかぎり、自分は「まき込まれる」側にいやおうなしにおかれたままで、いつのまにか「まき込む」側の眼でものを見たり、彼らといっしょに動き出して、他の人びとを「まき込む」ことを得々としてやり出したりするからです。そうした状態ほど「まき込む」側にとつて「まき込む」のに都合のよい状態はないにちがいない。佐藤さんは小佐藤さんを無数につくり出してそれで安泰なのですが、それは無数の小ヒトラーの存在がヒトラーの存在をつくり出し、彼の存在を安泰ならしめたのと同じことでしょう。スターリンさんにも小スターリンがあまたいたし、サトウリンさんにも小サトウリンがいくらでも出て来ることでしょう。

政治学の話に戻つて言えば、私が欲しいのは、もつともつと「まき込まれる」側に徹した政治学です。革命の本について言えば、「まき込まれる」側に発想の根をおいた、そこから運動もたたかいても、革命そのものも出發させようとする、そんな革命の本です。

私はさつき、政治学と言え「統治者の政治学」でなければ、学者のセイチな現状分析があるばかりだと言いましたが、「まき込まれる」側の眼で政治をとらえた本がかいもくくないというわけではないのです。たとえば、アリストパネスさんの『女の平和』というような喜劇がそうした本のひとつで、ベトナム戦争反対ならぬペロポネソス戦争反対を女たちのセックス・ストライキでやってのけた、というような発想は、まことに「まき込まれる」側の政治学の発想です。ほかにもいろいろあつて、ハーシエクさんつくるところの『兵士シュベイクの奇行』も、なかなか、そうした発想の産物ですが、アリストパネスさんに比べると、ハーシエクさんのほうは何やらはじめとして、アリストパネスさんのように古代的にあつけられかんと吹き抜けていないところがある。同じ近代、現代で言

うなら、山之口獺さんの詩のほうが私の言いたいことにピッタリするようです。ほかに詩で言うなら、金子光晴さん、もつと若いところでは、片桐ユズルさんの詩。小説家では、深沢七郎さん。これらの人たちの作品とそこににじみ出て来る書き手のくらしのスタイルがあらわしているのが、「まき込まれる」側の政治学です。

それがどんなものなのかは彼らの作品を実際に読んでいただくのがいちばんよいと思うのですが、「まき込まれる」側が「まき込まれる」ことを書いてあるだけのことなら、そんなものは、政治学ではない。それは「まき込む」側の政治学であり得ても、「まき込まれる」側の政治学ではない。「長いものにまかれる」ということばがあります。これはまさに「まき込まれる」側の知恵であり、生ま身の思想ですが、ただそれだけのことで終るなら、これはまさに、まかれてしまうだけのことで、それでおしまいになるだけのことであって、そんなものは政治学でも何でもない。かんじんなことは、どのように、まかれるか、どのようにまかれれば、まかれながらまかれないですむか、ということ、それが、私の言う、「まき込まれる」側の政治学です。

それは、おれはどんなことがあっても、まき込まれないぞ、まかれるものか、と威丈高にどなっていることではないのです。そんなふうになつていいる人ほど、いつのまにか、まき込まれ、まかれるどころか、「まき込む」側、つまり、長いものの側の一員になつてしまつて「まき込む」ことを始めるものですが、「まき込まれる」側の政治学は、そうした虚勢をはつたやり方とは正反對なやり方に基づいた政治学で、はじめから、自分は「まき込まれる」側に立つ人間であり、したがつて、それこそ、ほんとうにまき込まれもすれば、長いものにもまかれもする——そこまで自分のことをつきつめ

てとらえておいてから、そこで、どうするか。いや、もう少し具体的に言うべきでしょう。そのなかで、何を、いつ、どこで、どのように、どこまで、するか。

自分に何の幻影ももっていないのです。そして、幻影をもたないことで、かえって、長いものにまかれながら、しかも、まかれないうという至難のわざを可能にする具体的な手だてを見つけ出すことができる——私はそんなふうに考えるのですが、さて、ここで、もう一步を進めて、そのまま、つまり、「まぎ込まれる」側にあくまで徹しながら、長いものにまかれながら、あくまでそうしながら、まさに、そのことによつて、逆に長いものをまぎ返すことはできないものか。

この本を書こうと思ったのも、実はそのことを述べてみたかったからです。

4 佐藤さんとサトウリンさんなら同じことだ

こんな本だから、さつきも言ったように、自分にそくして語つて行くよりほかにはない。参考にするような本もたいてないからです。それに、これから（これまでもそうでしたが）私が述べようとすることを、古今東西のえらい人のことば、言説でぎょうぎょうしく飾り立ててもしょうがない。何トカ主義であるとかないとか、論じたててみても始まらない。そんなことはすべて私の好みに合わないし、まえに使ったことばをもう一度使つて言えば、肌がなじまないことですが、もともと、私がこの本のなかで書いていることには、どんなえらい人の言説をもち出して来ても、どこかにはみ出してしまうところがあるとも考えるのです。何トカ主義のレットルではどうしようもない部分がある。そして、私には、そのはみ出してしまうところ、どうしようもない部分が、おそらく、もつともかんじんか

なめのところ、もうひとつ言うと、かんじんかなめであるとともに面白いところであるように見えて、そのところを中心に考えてみたい、解きあかしてみたい。念をおしてくり返しを言っておこうと思うのですが、そのところのはかんじんかなめであるとともに面白いところで、それがとりもなおさず人間——私のなかにいるひとりの人間の面白いところですが、面白いからこそ人間は動く。すなわち、そうでなければ、本を書くこともない。

自分にそくして語ると言っても、ひとりよがりの本を書くつもりはありません。ひとりよがりというのは、つまり、傲慢だということ、古代ギリシア人同様、私がいちばん嫌いな悪徳は傲慢です。（傲慢は、若さという傲慢をふくめて、私にはガマンがならない。）私の考えでは、自分のなかのひとり人間、無数にいるひとりの人間のことを忘れてしまったとき、人はひとりよがりにも傲慢にもなるにちがいない。そして、もうひとつ、私が嫌いな本は、書き手である自分がどこにどうしているのか、さっぱり判らない本です。なるほど、みごとに書いている。世界の真理というようなものがたしかにそこにはある。私もそういう本に出くわすと一種畏敬の気持ちにうたれるのですが、ただ、そのうち、ふと、私は気づいてしまう。この真理と書き手はいかなるかかわりあい立っているのか。なんのかかわりあいもつていないのではないか。それで、あなたはどないしはりますね。私は訊ねたくなる。あなたは、どこで、どうしはるつもりですね。もつとも、私がそんなふうには訊ねてみたところで、相手は平然とことばを返すだけのことかも知れない。また、本を書くよ。革命の本をな。私はそんな本は、よしんば、革命の本であろうと書きたくない。

もちろん、「古代ギリシアにおけるウナギの調理法について」なら、あるいは、「紫式部における性

意識の深層心理学的考察」なら、自分とかかわりあいのまったくないところで、枕になるようなぶあつい本を書きあげることができるとも知れない。そんなところにまで自分がいちいち顔を出していたのではたまったものでないにちがいないが、そんな場合でも、私は書き手のことが気にかかつて来たたちで、たとえば、書き手がウナギが好きなのか嫌いなのか、あるいは、セックスについてどんな考えをもっているのか、現在のポーノグラフィー裁判に対してどんな態度をとる人物なのか——そんなことをいつでも考えてしまうのです。まして、革命の本というものになると。——

革命の本とは、言うまでもなく革命のことを書いた本で、革命とは、結局、人間のことだから、これは当然のことですが、さて、人間のことである以上、そして、書き手である自分も人間——ひとり人間である以上、自分のことをカッコのなかに入れることはできない。自分だけは例外だとみなすことはできない。

自分にそくして語るとはそういうことです。私自身のこの本について言うなら、たとえば、私はいま三十九歳の中年男で、このところ、年をとりつつあるという実感をもっていて（その実感は、人間は年をとるものだな、という、判りきっているみたいだがそのくせ年をとらないかぎり判らない自己認識——私個人のものであるとともに人間全体のものである自己認識につながっている）、その上、このところ、からだのぐあいがよくないのですが、そういう私自身をふくみ込んだかたちでしか、私はこの本を書けない。ということは、年をとりつつある中年男、年をとってしまった老人、あるいは、病院で寝たきりになっている病人のことを自分のなかに感じとることで、私のからだのなかにいる無数のひとりの人間とはまさしくそうした人たちをふくみ込むものであって、私は、たとえば、革

命——私の言う「世直し」ということがらを考えるにあたって、これまで革命の本なんかにはまともにとり上げられたことのない、人間のくらしの二つの重要な事実、年をとること、病気になることにもまともにもぶちあたって考えてみたいと思うのです。どんな革命の本も、まるで、人が年をとらないというぐあいには書かれていない。病気になるなんてないことのように述べられている。しかし、人は年もとれば、病気にもなるのです。革命——いや、「世直し」という運動のなかにおいても、それがみごとに成就したあとにおいても。

この二つのことがらがことさらに重要だと考えるのは、ひとつには、私が「世直し」を人間の運動としてまずとらえるからでしょう。そして、もうひとつ、つけ加えるなら、人間の運動は運動でも、長くつづく、いや、一生モノの運動であること。——

私が革命の本に抱く不満のひとつは、たいていが分析にばかり精を出して、そのところではなかなかみごとにセイチであるのに、いざ、かんじんの運動ということになると、そして、運動の目的であるとともに素材である人間のこととなると、いかにもお粗末だということです。つまり、いぜんとして「前衛」が「大衆」を「正しく指導し」、「まき込む」というたぐいの運動論の展開があるだけでそれはまったく私の気に入らないが、百万歩をゆずってそうした運動の原則を認めるにしても、さて、どんなふうにして「正しく指導する」のか、「まき込む」のか、それと人びとの自発的な意志とがどこでどう結びつくのかという具体的な手だてのこととなると、まったくひらめきがない。私がこう言うとき、たとえば、毛沢東さんのものを読んだことがないのか、中国革命の偉大な成果におまえは眼をつぶろうとするのかと威丈高に言い出す人が出て来るものですが、私がここで問題にしているのは私

たちが今げんにそこであらしている日本の社会のこと、その社会での革命のことで、私たちにとって、そこがまったくのロードス島なのです。そこで私たち自身の足を使って跳ぶよりしようがない。

そして、このわがロードス島では、このところ、「前衛」によつて「正しく指導された」わけでもなければ、「まぎ込まれた」わけでもない人びとの自発的な運動が近年むやみと現われ出て来ていて、いちばんかんじんな問題はむしろそちらのほうにあるのではないかと思うのです。「前衛」だとか「大衆」だとか、そういうレッテルはりを大きくこえたところで運動は起つて来ていて、運動は、誰もが「前衛」であり、誰もが「大衆」であるというかたちで人びとのあいだにひろがっている。いや、そういうかたちでしか、これからの運動のかたちはあり得ないし、あつては困る——問題は、人びとがあちこちで、また、さまざまな問題について、それこそ自発的にそんなふうを考え出したということでしょう。

率直に言うると、人びとは、「前衛」をうたがっているのです。革命が起つてみたところで、佐藤さんがサトウリンさんになるだけのことではないか。実名をあえてあげて言えば、日本共産党は「民主主義」を今や党の内部の問題もふくめて強力に主張する政党ですが、その「民主主義」がどれほどほんものなのか——人びとがそこに今ひとつ信用しがたいものを感じているのは事実です。それこそかつての共産党のような、あるいは、今の多くの社会主義国の「民主主義」ならゴメンこうむりたいというのが人びとのウソいつわりのない気持でしょう。いや、人びとの疑念はもちろん共産党のみならず、共産党と正面から対立する「新左翼」に対してもむけられていて、人びとが佐藤さんのやり口にウンザリして、学生たちの行動に大きな共感をおぼえながら、それでいてもう一步というところで支

持をためらっているのは、そこにおいてなのにはちがいない。学生たちにおねがいはしたいのは、そういう人びとをムチモーマイなる、おくれたヤカラとして簡単にかたづけられないことです。まして、「人民の敵」、「革命の敵」というようなこわいレッテルをペタペタとはりつけないでいただきたい。日本人びとは、みんなそれぞれにもの知りで、その知識には、かつて「正しく指導され」、「まき込まれ」てひどい目にあつたという体験がそれを裏うちするものとしてあつて、そういう彼らに対して、たとえば、今地球上に存在する社会主義国の社会主義はみんなニセモノで、あんなものはみんなスターリン主義の要素をもつていて、おれたちのつくり出すものこそほんとうの人間の解放をなしとげる社会主義だと安易に言つてのけて欲しくない。そんなうまいことばで（いや、ほんとうのことを言うと、ことばのほうもあまりうまくない。むやみと漢語が入つて、横文字まで入つて、何を言っているのかさっぱり判らない場合が多い）すぐさま人びとがうなづくほど世の中は甘くないのです。これまででできたものがみんなニセモノなら、新しくできるものもニセモノである確率のほうが大きいだろうと、実際的に発言する人もいるでしょうし、しかし、問題はそういう皮肉家のことより、そうしたみごとなことばを、たとえば、頻発する「内ゲバ」が現実に残りに裏切つていくという事実なのです。スターリン主義におちいるかどうかは遠い未来に判るのではなくて、未来に至る過程のなかで日々に示されることであると私は考えるのだが、「内ゲバ」の倫理的、論理的帰結はスターリン主義以外にはないというところですが、まだ若い学生革命家諸君には十分に判つていないのでしょうか。この問題はあとで深く考えてみたいのですが、たとえば、自分の倫理、論理の追究から「内ゲバ」が必然的なまちがいのないものであつても（このところ、そうした調子の「内ゲバ」ヨーゴ論が目につきます。運動

に關係のないやつは黙っている、当事者の苦悩はおまえら門外漢に判るか、というわけです)、それが必然的なまぢがいのないものであったとしても、「内ゲバ」と人びとの關係はいつたいていどうなっているのか。政治とは自分のみならず他人に眼をむけることですが(そうでなければ、自閉症の「政治ゴッコ」です)、その他人というのは何も自分の党派の同志や、あるいは、敵対する党派の「敵」のことばかりではなくて、「内ゲバ」の外側に無数に存在する他人——人びとという名をそこにこそ使うべきだと思うのですが、そうした他人のことで、本来なら、そういう他人を無数のひとりの人間として自分の体内にもっていないと困るのです。その無数のひとりの人間と「内ゲバ」の關係は、いつたいていどうなっているのか。率直に言うと、若い学生革命家たちの行動にもつとも共感をもっている人びとが、こんな調子だったら、よしんば革命ができたところで、まだしも革命前のほうがよかつたということになるのではないか(人びとはここで何も物質的なことを言っているのではないのです)という危惧を心のどこかにもっているのは事実です。いや、人びとというふうには他人事のように言うのはよそう。私がついている。

ことは「内ゲバ」だけにかぎらなくて、たとえば、「武装闘争」をとなえる一派のなかに、三島由紀夫さんの行為や思想に心酔する人たちが現われ出て来たりすると、三島氏が主張するクーデタと革命派の「武装闘争」がどこでどちらがうのか判然としなくなつて来ると思うのです。もちろん、自分の論理、倫理から言えばちがうのかも知れないが、「武装闘争」と人びとのかかわりあいから言えば、類似点のほうがちがいよりも大きく出て来てしまうのではないか。私は、やはり、ここでも、自分が「まき込まれる」側に立っていると思うし、それを大切にしたいと考えるのです。そこから見れば、三島

さんのクーデタ計画も三島さんに共感する若い革命家たちの「武装闘争」もちがうというにはあまりにも重なりあつて見えて来る。三島さんは「知行一致」をとなえ、若い革命家たちもそこに感激したようですが、それは言うまでもなく「知」と「行」は一致しなければならないということを基本とした論理であり倫理でした。とすれば、三島氏の「行」に共感した以上は、「知」にも共感しなければならぬということになるのは当然です。「知」は「知」、「行」は「行」というぐあいにうまいこと切りはなすことを三島さんは排したのですが、そうだとすると、三島さんに共感する若い革命家たちの「武装闘争」はそもそもどのような原理にもとづくものになっているのだろう。もちろん、そうした人たちが「武装闘争」を主張しているわけでもないことを私も知っていますが、それにしても、「武装闘争」とそこに「まき込まれる」側の人びととの関係はどうなっているのだろう。うち見たところ、人びとはいぜんとして「まき込む」対象、利用すべき客体として存在していて、主体ではない。

つづきは製品版でお読みください。